

20年度発掘調査遺跡の紹介

ろくたん だみなみ 六反田南遺跡

(糸魚川市大字大和川字六反田ほか)

六反田南遺跡は、日本海に近い海川右岸、標高3.5～5.5mの沖積低地に立地します。北陸新幹線および一般国道8号糸魚川東バイパスの建設に伴い、平成18年度から発掘調査を行っています。今年度の調査面積は7,800㎡で、縄文時代中期、古墳時代前期、奈良～平安時代の遺構を検出しました。

縄文時代中期の調査では、微高地上(標高約4.5m)に竪穴住居2軒、竪穴状遺構3基、土坑3基、ピットなどの遺構を検出しました。竪穴住居は、昨年度検出した3軒と合わせると計5軒となり、この時期の低地遺跡では県内初となる集落遺跡の発見となりました。住居は、長辺が5m前後、平面

形は楕円形か隅丸長方形を呈します。どの住居も掘り込みが浅く、堅く締まった床面をもっていません。4号住居からは石囲炉と石敷き(写真1左上)、5号住居からは石囲炉と埋設土器2基(写真1右下、写真2)の複式炉を検出しました。遺物は、北陸の上山田・天神山式土器が主体で、そのほかに東北の大木式土器・円筒上層式土器、中部高地系土器など異系統の土器も出土しました。これら中期中葉の土器群のほか、中期前葉の新崎式土器(写真3左上)なども少量出土しています。石器は、打製石斧、磨製石斧、貝殻状剥片、敲石、砥石、磨石などが出土しました。磨製石斧の未成品や、蛇紋岩・ヒスイなどの剥片が定量認められることから、この地で石器製作やヒスイの加工をしていたことがわかります。祭祀具は、土偶の胴部1点と石棒の頭部1点のみの出土です。当遺跡は、遺物量はさほど多くはなく、集落の規模も小さいですが、同時期の拠点集落である長者ヶ原遺跡など周辺遺跡との関係も含め、どのような役割を担った遺跡か検討することが今後の課題です。

古墳時代以降の調査では、掘立柱建物4棟や、甕・器台などの土器を一括廃棄した土坑(古墳時代前期)を検出しました。また、縄文～古代の土器を多く含む川跡も検出しました。この川跡からは、長脚で3方に2段のスカシをもつ須恵器無蓋高杯(古墳時代後期)がほぼ完形の状態で出土したほか、槽や曲物、皿、舟形、斎串、建築部材など、多種多様な木製品も多量に出土しています。(株)吉田建設 山本友紀)



写真1 竪穴住居(縄文時代中期)



写真2 5号住居 炉(縄文時代中期)



写真3 縄文時代中期前～中葉の土器

たけはな 竹花遺跡

(糸魚川市寺町2 - 458ほか)

竹花遺跡は、糸魚川駅の東側400m、海岸から400m内陸の沖積地^{ちゅうせきち}に立地します。北陸新幹線の建設に伴い、1,400㎡を発掘調査し、室町時代と古墳時代の水田跡を検出しました。特に、古墳時代前期後半の水田跡は良好な状態で残っており、畦畔^{けいはん}の構築方法を知る上で貴重な資料が得られました。

畦畔は、およそ10mまたは20mの間隔をもちながら、おおむね東西方向に構築されていることがわかりました。構築方法は、土を盛り上げるものと、板を敷きつめて足場にするものがありました。前者は、およそ1mの幅で、周囲よりも20cmほど高く土が盛られていました。畦畔の中には流木などが挟み込まれており、盛土材には周囲よりも砂を多く含む土が利用されていました。これらの工夫により、地盤の沈下を防いでいたようです。後者は、幅およそ1mの中に板を敷きつめ、足場を確保していました。軟弱な地盤であるため、板が沈下しないように枕木^{まくらぎ}が敷かれ、さらに足場板が動かないように両側に杭を打ち込んでいました。安定した足場を確保するための工夫を垣間見ることができます。なお、敷きつめられた板は、建築部材を再利用したものが多く、中には4mを超える長いものもありました。当時の建築を知る資料としても注目されそうです。また、畦畔を形作る盛土や足場板を剥ぎ取ると、下から木製の農耕具が良好な状態で出土しました。中には、ほぼ完全な形の高杯^{たかつき}と一緒に出土するものもあり、畦畔を構築する際に、お祭りが行われた可能性が考えられました。

このように、竹花遺跡で検出した古墳時代前期の畦畔とそれに伴う遺物は、当時の水田耕作の実態を知る上で貴重な資料となりそうです。今後、土壌分析の結果なども踏まえて、整理作業を進めていきたいと考えています。(加藤 学)



調査範囲近景



土を盛り上げた畦畔



木を敷きつめた畦畔



畦畔の下から出土した農耕具(ナスビ形曲柄鍬)

ちごづくり 千古作遺跡

(柏崎市大字剣野町字千古作288 - 3ほか)

千古作遺跡は、鵜川左岸の丘陵裾野の沖積低地に位置し、標高3m前後の自然堤防上に立地します。一般国道8号柏崎バイパス建設に伴い、橋脚部分の計850㎡を対象に5月から7月初旬まで調査を行いました。

出土した遺物は中世(13~15世紀)のものが大半を占め、中世土師器・珠洲焼・青磁・白磁・瀬戸美濃焼等があります。ほかには木製品、土錘、磨石類、砥石、鉄滓、銭貨等が出土しています。

検出した遺構はピット8基、土坑1基、井戸1基、溝13条、杭12本、性格不明遺構5基で、大半が中世の遺構と考えられています。また旧河川1条を検出し、腐植土・自然木を主体とした覆土中から、形代状木製品が数点まとまって出土しました。

今年度の調査範囲は、居住域ではありませんでしたが、井戸等も存在することから、集落の縁辺部と考えられます。また旧河川出土の形代状木製品は、底面に刺したような痕跡も認められることから、祭祀的な場として利用していたことも考えられます。

(石川智紀)



旧河川の検出状況(北から)



河川内の木製品出土状況(東から)

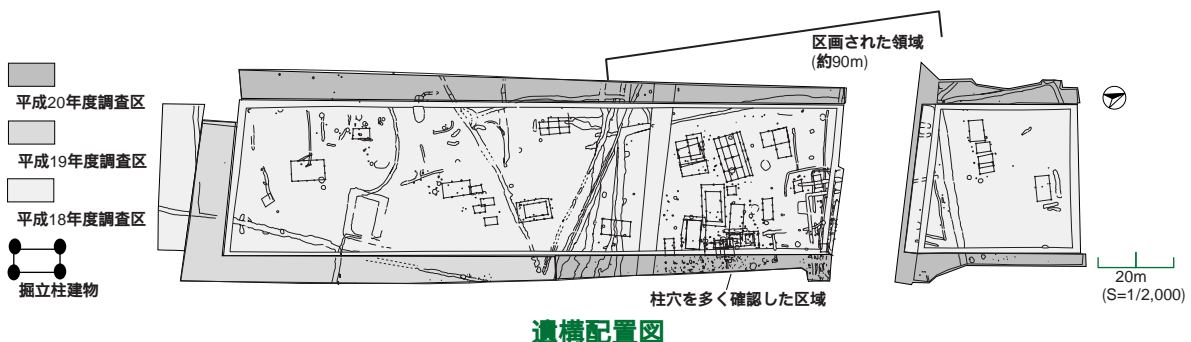
たやみち 田屋道遺跡

(村上市九日市字堂田1459ほか)

田屋道遺跡は、越後平野北東部の村上市(旧神林村)にあり、海岸から約2km、標高1~1.5mに位置します。日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、平成18年から3か年にわたり発掘調査を行っています。調査面積は18年度8,614㎡、19年度1,066㎡、20年度が1,956㎡(予定)です。

今年度の発掘調査は、18年度調査区の東(東側調査区)及び西(西側調査区)を対象に行いました。遺跡の時期は12~14世紀(鎌倉~室町時代)で、確認した遺構は柱穴217基、井戸3基、溝20条(平成18年度調査区からの延長分を含む)、土坑8基、性格不明遺構5基、杭11本です。

東側調査区では多数の柱穴や井戸跡を検出しており、この区域が集落の中心であると推察されます。西側調査区では南北方向にのびる屋敷地を区画する溝を確認しました。18年度の調査結果と合わせると、集落の大きさは南北方向が約90mで、方形を呈することがわかりました。(株)シン技術コンサル 北村 淳)



がらめき 柄目木遺跡

(阿賀野市大字小里字柄目木75 - 2ほか)

柄目木遺跡は、阿賀野川右岸の沖積地の自然堤防上に立地します。現況は水田で、標高は約5.8m、調査区の東には旧小里川が流れ、東南には五頭山が見えます。一般国道49号阿賀野バイパス建設に伴い、5月から12月までの予定で延べ12,700㎡を対象に発掘調査を行っています。これまでに3層の遺物包含層(1層:中世、2・3層:古代)を確認しました。今回は調査がほぼ終了した中世を中心に報告します。

14~15世紀頃と見られる集落跡を検出し、掘立柱建物5棟、井戸7基、溝12条、土坑14基、焼骨の入った土坑5基と多数のピットを検出しています。

掘立柱建物の規模は1×2間または1×3間で、北西に長軸を向けるものが主体です。片廂の建物が1棟あり、隣接して直径3.1m、深さ1.6m以上の井戸を検出しています。別の掘立柱建物の近くでは、直径3.9m、深さ2.3m以上の井戸を検出しています。どちらも大規模ですが、井戸側はありません。溝では、建物を区画するような大きなもの(幅2m、深さ1.3m、長さ68m以上、断面形がU字状)を検出しています。溝の一部は途切れており、出入り口にあたる可能性もあります。この溝に平行してやや浅い溝も検出していますが、こちらは途切れていません。また、浅く平行して走る2本の溝もあり、道路側溝になる可能性もあります。焼骨が入った土坑には、渡来銭が2枚出土したものがあることから墓と考えられます。また、焼骨の中には、部位を確定できる可能性もある大きな骨も残っていました。骨の分析はこれからになりますが、中世の葬送儀礼の様子が垣間見えます。

中世の遺物は珠洲焼、越前焼、土師器、青磁、白磁、砥石等が出土しています。

古代上層では少量の須恵器、土師器と道状遺構が複数検出されています。今後は3層目(古代下層)の調査に入ります。遺構・遺物ともに大量の出土が期待されます。秋以降には現地説明会を開催し、皆様にご紹介できると思います。どうぞご期待ください。(佐藤友子)



中世遺構全景



片廂建物



直径3.9mの大井戸



焼骨の入った土坑

かつらぎだ 桂木田遺跡

(村上市十川字桂木田94-3ほか)

桂木田遺跡は、^{みおもてがわ}三面川左岸の^{ちゅうせきびこうち}沖積微高地上、標高15m程に位置し、現況は水田です。日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、4月から6月にかけて2,750㎡の発掘調査を行いました。検出した遺構は弥生時代の遺物集中地点1か所、土坑2基、中世以降の焼土遺構1か所、炭化物集中地点3か所、流路1条です。

遺物集中地点は住居の可能性も考えていますが、柱穴や炉、周溝等は確認できず、弥生土器89点と^{はくへん}剥片石器1点が出土したのみです。また、遺物集中地点内から2基の土坑(SK11・13)を検出しました。SK13は覆土中に焼土ブロックを混入しており、その性格は炉の可能性を含め、今後の検討課題です。

出土した弥生土器は東北・北陸両地方の技術が融合しており、特に秋田県宇津ノ台式の影響を受けた在地の土器と言えます。この土器は弥生時代中期中葉～後半代に属します。

遺跡は遺構や遺物の検出状況から、「居住域」と考えるより、何らかの「活動の場」であったと想定されます。弥生時代中期(約2,000年前)の当地域周辺は、北陸・東北地方との交流が盛んであったことがうかがえます。

(榊吉田建設 平田貴正)



遺物集中地点 遺物出土状況



出土した弥生土器

埋文インフォメーション

平成20年度出土品展を下記のとおり実施します。多数のご来場をお待ちしています。

- 1 期 日 平成20年9月27日(土)～10月26日(日)
- 2 会 場 新潟市豊栄博物館(新潟市北区嘉山3452)
- 3 展示遺物 **【事業団出展遺跡】**
 村上市 谷地遺跡、山元遺跡、大館跡、西部遺跡(北側)
 新潟市 西郷遺跡、正尺C遺跡
 阿賀野市 狐塚遺跡
 上越市 延命寺遺跡、北新田遺跡
【新潟市埋蔵文化財センター出展遺跡】
 上大川遺跡
- 4 発掘調査報告・展示解説
平成20年10月4日(土)13:15～16:00
- 5 問い合わせ 調査課保存処理班

平成20年度出土品展
「出土品が語る新潟の歴史」

平成20年 9月27日(土)～10月26日(日)
新潟市豊栄博物館 展示ホール(新潟市北区嘉山3452)
観覧時間 9:00～17:00 観覧料 3名以下 100円、10名以上 400円

入場無料

新潟市埋蔵文化財センター
新潟市豊栄博物館

平成20年10月4日(土) 13:15～16:00
発掘調査報告・展示解説
調査課保存処理班

会場情報
新潟市豊栄博物館 新潟市北区嘉山3452
TEL: 025-222-1100 FAX: 025-222-1101
新潟市埋蔵文化財センター TEL: 025-222-1100 FAX: 025-222-1101

整理報告遺跡

たてのおおたにせいてつ
立野大谷製鉄遺跡

(長岡市大字島崎字立野3476ほか)



図1 製鉄炉での作業の様子

製鉄炉は、粘土とスサ（ワラなどの植物の葉や茎）を混ぜ合わせたもので構築しました。炉の形は、粘土を風呂桶状に積み上げた箱形炉に似たものだろうと推測されますが、鉄を取り出すために炉の壁を頻繁に取り壊したらしく本来の姿はよくわかっていません。炉の側面に羽口と呼ばれる送風管が何本も装着された特異なものと考えられます。写真1は、30点以上出土した羽口のうちの1点で、外径12cm・内径6cmです。羽口の外面にはスマキ成形状の圧痕が残されています。一方、外面をヘラケズリで成形した羽口も少量ながら出土しており、羽口の製作技術には2つの系統が存在したことがうかがえます。図1は福島県の遺跡をもとにした復元図で、棒から吊るされた縄につかまった2人が交互に板を踏みつけて風を送り込む様子を描きました。残念ながら、立野大谷製鉄遺跡からはこのような「ふいご」の痕跡は発見できず、実際の送風方法は不明です。しかし、炉の周辺からはピットが検出されており、何らかの施設を伴っていた可能性が高いと考えています。

製鉄の過程で不純物として分離される鉄滓は炉の外側へ排出されました。写真2は流れ出した鉄滓が固まったもので、表面の皺の様子から、写真左側から右に向かって流れ出したことがよくわかります。

共伴した土器が少なく、また遺存状況が良くなかったことから、製鉄炉の詳細については不明な点が少なくありません。しかしながら、排滓場を中心に多くの鉄関連遺物が回収されており、それら遺物の詳細な分析をとおして、炉の具体的な構造や技術系統などを解明することが今後の課題です。（渡邊裕之）



写真1 羽口



写真2 流出滓



地名の古さ—近年の発掘調査出土品から—

平成の大合併も一段落しました。合併により新潟県では111の市町村名が31となり大幅に減少しました。また、近年の町名や地番変更により大字・小字名の地名が変更されることもあったのではないのでしょうか。もっとも小字名などは、地籍図に残っていても普段の生活ではほとんど使われなくなってきています。しかし、私たちの身近にある地名(大字・小字)は大変古くからのものであることがわかってきています。このような例を上越地方の近年の発掘調査の出土品から見てみたいと思います。**上越市延命寺遺跡出土の21号木簡から** 写真1は平成19年に出土した天平7(735)年の田地の賃貸借の木簡です。日本で最古の土地売買木簡として注目されています。土地の所在地として「・・・野田村奈良田三段又中家田六・・・」と「野田村」が記されています。この野田村は遺跡の近くにある上越市大字上野田・下野田に比定されます。野田村はこれまで慶長2(1597)年に作成された「越後国郡絵図」などから15世紀後葉まで遡ることがわかっています。21号木簡の出土によりさらに800年遡り、今から約1,300年前からの地名とわかりました。このほかこの木簡には「物部郷」(上越市清里区大字武士付近の郷名)、伊神郷(上越市三和区付近の郷名)の地名があり、わが国最初の百科辞典とも呼ばれる『和名類聚』(931~938年成立)の初見より、さらに200年遡ることがわかりました。

糸魚川市角地田遺跡出土の墨書土器から 写真2は「臣」と書かれた10世紀中葉の土器です。この遺跡では「臣」と考えられる墨書・ヘラ書きされた土器が23点出土しています。この「臣」は地名と考えられ、遺跡の所在した大字小見が10世紀中葉まで遡ることがわかりました。ちなみに大字小见到隣接する集落名「鶉石」は、延喜式(927年成立)に記された北陸道鶉石駅に比定されています。

上越市岩ノ原遺跡の墨書土器から 写真3は「石井庄」と書かれた9世紀中葉の土器です。この遺跡では「石井庄」「石井庄」と墨書きされた土器が51点も出土し、東大寺の領有地である石井庄の位置を決定付けました。遺跡名の岩ノ原は小字名で、9世紀中葉の「石庄」「石井庄」が地名として残ったものと考えられます。

これらの地名は、いずれも1,000年以上前の古代まで遡ります。わずかな例ですが、私たちの身の回りの地名が、大変古くからのものであることに驚きます。(高橋保雄)

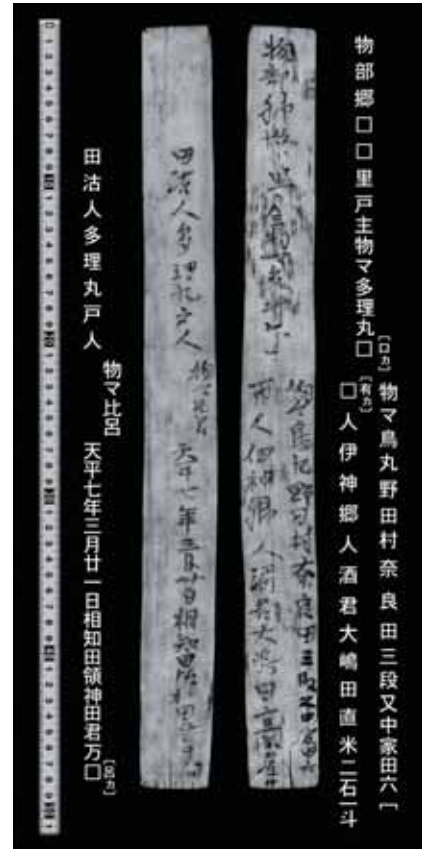


写真1 延命寺遺跡出土21号木簡



写真2 角地田遺跡出土 墨書「臣」土器



写真3 岩ノ原遺跡出土 墨書「石井庄」土器

県内の遺跡・遺物62

おおいだ
大井田城跡(昭和53年県指定)
 (十日町市中条字城山)

大井田城は、JR 飯山線魚沼中条駅から北東に約1.5km、標高約300mの山頂に築かれた山城で、山頂の主郭を中心にして左右2列・上下3段に曲輪を配置する構造になっています。南は栃川入沢(馬サクリ川)、北は宝蔵入沢(シッピー川)で削られた急な崖があり、西側に緩やかに傾斜して広がっている地形を巧みに活用しています。主郭の背後(東側)には2条の空堀があり、尾根を遮断しています。曲輪群の前面下方には幅5~10mの帯曲輪が備えられ、北端には高さ約2mの土塁、南端には空堀や8条の畝状縦堀が設けられています。このように周囲からの攻撃が難しく防御しやすい構造は、戦国時代によく見られるものですが、築城は南北朝時代に遡るものと伝えられています。

大井田城は古来『太平記』に南朝方として勇名をとどろかせた越後新田氏一族の中心勢力であった大井田氏累世の本拠地と『新編会津風土記』に伝え、地元にもその伝承が残っています。大井田氏は新田義俊に始まります。義俊は上野国碓氷郡里見庄に住み、里見氏を名乗りました。その孫、義継は新田庄大島郷に移り住み、姓を大島に改めます。後に義継は大島郷を三男時経に譲り、次男氏経とともに越後国波多岐庄(妻有庄)大井田郷に土着して大井田氏の祖となりました。その移住の時期は明確ではありませんが、建治2(1276)年に一族の鳥山時成が妻に波田岐庄の一部を譲与していることから承久の乱後とも考えられます。大井田氏は元亨元(1321)年、信濃国下高井郡の地頭職である市河盛房と婚姻を結んでいます。以来、元弘3(1333)年から正平23(1368)年まで宗家の股肱となって南朝に殉じました。康暦2(天授6、1380)年、この地域は北朝側の上杉憲方の領するところとなり、上杉景勝の時代に大井田監物房仲の名が見え、天正11(1538)年、信州飯山に領地を与えられています。

大井田氏と中条氏との関係については不明な点が多いのですが、『参考太平記』などによれば、中条氏は南朝方として大井田氏などと行動を共にしており、同族関係にあったのではないかと思われます。『一遍上人絵詞伝』に正応6(1293)年頃、越後国波多岐庄中条七郎蔵人の存在が伝えられ、その後、中条氏が存在することから、伝承とは別に本来中条氏の根拠地であったと推測することもできます。

(写真提供：十日町市教育委員会)



展示模型(十日町市博物館)



山頂の忠魂碑



登り口

埋文にいがたNo 64

発行 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
 〒956-0845 新潟市秋葉区金津
 93番地1
 TEL (0250) 25 - 3981
 FAX (0250) 25 - 3986
 e-mail : niigata@maibun.net
 URL : http://www.maibun.net

印刷 阿部印刷株式会社